

## 可能性を切り拓くのが専門職の役割

特定非営利活動法人いい介護研究会  
国清浩史

“上野文規氏”（介護総合研究所元気の素 代表）から「（介護に従事する者、介護保険に携わる者である）君たちの役割は、昨日まで不可能だと考えていた理論と現実を、今日からは可能に変えていくこと」と教わってきました。

私共と定期アドバイス契約をいただいている事業所の一つが、「**デイサービスセンター筆の都**」（安芸郡熊野町）です。

毎月事業所へお伺いし、研修やカンファレンスを通じて、より質の高い介護サービスが提供できるようにアドバイスを行っております。

ご縁をいただいた当初より、「皆さんには通所介護事業という視点でアドバイスするのではなく、在宅支援事業を行うという視点で助言をします。一緒に、この町で、在宅支援を推進していきましょう」と伝えてきました。（当時は「何のこと？」といった表情を浮かべる職員もいました）

年月を重ね、今や、常に利用者の在宅での生活を意識し、目の前の方が、在宅生活を続けるために自分たちに何ができるかという視点で仕事をしています。

単に家族介護の肩代わりすることが介護負担軽減だという考えで終わることなく、**利用者本人や家族が諦めている可能性も見つけ出しどうすれば実現するか、真剣に悩み、考え、行動しています。**

そんなデイサービスセンター筆の都の代名詞が「お風呂」

元々は機械浴槽があったのですが、2年前に浴室改修することになり、職員が経営者に自分たちが実現したい介護の理念と方法論のプレゼンテーションを行い、家庭浴槽のみの浴室にリニューアルしました。

**「お風呂はゆっくりと肩までつかりたい」**

これが利用されている方々の“思い”だと知っているからです。

しかし…本心は…**「家のお風呂にゆっくりと肩までつかりたい」**

これが利用されている方々の“本心”だと知っています。

だから！

**今は叶わなくても、少なくとも筆の都では、長年入り慣れた湯船に入って欲しい！**

**今は叶わなくても、いつか自宅のお風呂に入れる日が来るかもしれない。その日に備えよう！**

そう、**可能性を切り拓く仕事**をし続けています。

ただ、この理念を実現させることは容易いことではなく、数え切れないほどの回数、汗と涙を流しながら、トレーニングを繰り返しています。

でも、全ては、利用者や家族にとって、幸せを感じて貰える瞬間の可能性を切り拓くためならば不思議と頑張ることができるのです。

「私たち専門職の仕事は、昨日まで不可能だと考えていた理論と現実を、今日からは可能に変えていくこと」

見えていることや、聞こえてきたことが全てではないこと。

利用者や家族のためになることであれば、耳障りなことでもきちんと提案すること。

そして、挑戦することから決して逃げないこと。

デイサービスセンター筆の都の職員たちは、まさにこの言葉の通りの実践を積み重ねています。（時には失敗もありますが…）

熊野町にとって、“財産”だとは思いませんか？

私たちいい介護研究会は、こんなデイサービスが広島県内へもっと増える可能性を信じて、全力で取り組んで参ります！

根拠に基づいた介護を提供するために  
トレーニングを繰り返しています。



重度と呼ばれる状態になられた方へも、  
人が本来する動き＝尊厳を守るために、  
工夫を凝らし、技術を鍛えます。



お風呂に入れる可能性があるならば、人間生理に基づき  
徹底的にシミュレーションを繰り返します。